

# 「障害者の受け入れについての大学による 意思決定」に関する研究

佐藤尚人

## 研究の目的

身体に障害を持つ学生（以下障害学生と略す）の受け入れについて、全国の大学はそれぞれさまざまなシステムや基準によってその可否の判断・意思決定をおこなっていると思われる。それでは、その受け入れについての意思を決定する際、各大学・学部ではどのような要因をよりどころとしているのであろうか。大学という組織を運営する人間（例えば大学・学部の最高責任者や教授会）が意思を決定するという考え方と、人為的な判断の可能性をこえて大学・学部の存在それ自体が意思決定を方向づけるとの考え方が仮定できる。ここでは、後者について「学部の学系の別（以下学系別と略す）」と「大学・学部が宗教系であるかどうか、また女子大であるかどうか（以下宗教系・女子大別と略す）」という大学・学部自体のもつ属性の2つを要因として取り上げ、これらが障害学生の受け入れについての意思決定（障害学生に対する「入試時の配慮」および「今後の対応」）のよりどころとなるかどうか、さらにはそれが実際の障害学生の受け入れにどのように影響しているかをみる。（下図）

「大学・学部の属性」

（学系が何であるか・宗教系あるいは女子大であるかどうか）

↓

「受け入れ姿勢」

障害学生の受け入れについての意思決定

（入試時の配慮がされているかどうか・障害学生を今後受け入れるかどうか）

↓

「受け入れ率」

実際の障害学生の受け入れ

意思決定の要因として「学系別」を取り上げたのは、大学の入学時の選考においては、当然のことながら入学後にその学部（学科）でおこなう教育方法あるいは内容に適した学生であるかどうか重要な判断基準であり、そうであれば、身体に障害があるかどうか入学の可否の判断基準として大きな比重を持つ学部・学科があると考えられるからである。また、「宗教系・女子大別」を取り上げたのは、大学が設立された時の理念（大学でおこなう教育についての基本的な考え方）の違いにより、障害学生の受け入れに対する大学全体としての姿勢に差がでてくると考えたからである。

## 方法

流通経済大学障害者教育問題研究会がおこなったアンケート調査（天野ほか1990年 a）の結果をデータとして用いた。全国の4年制の大学の全学部の中から517学部を選び、各学部長宛にアンケートを送り314学部から回答があったものである。

## 結果と考察

### 1 意思決定の状況（受け入れ姿勢）

まず「学系別」「宗教系・女子大別」でそれぞれ障害学生の受け入れに関する意思決定にどのような違いがあるかをみる。

#### （1）学系別

##### a 入試時の配慮

障害学生に対して入試時にどのような配慮をおこなったかを学系別にみたのが表1である。人文科学系・社会科学系では、実際におこなうには時間や人手がかかり困難が大きいと思われる配慮内容（「代替問題の用意」や「回答方法の工夫」）についても約1割から3割の学部で配慮が実施されており、またそれ以外の配慮（「点字などの特別の出題方法」も困難が大きいと思われるが）は半数前後の学部で実施されている。他方、工学系・農学系・医学系・薬学系でみると前者（困難の大きい配慮）の実施はいずれも該当なし、また後者についても該当無しまたは3割程度の実施にとどまっている。人文科学系・社会科学系と比較すると、体育芸術系や家政生活系においても配慮の実施の割合は低い。以上は、工学系などいわゆる理系の学部や体育芸術系の学部などが、入学後の教育の中で実験や実技など身体を使うことを多く求めるため、入学後の勉学における適性をあらかじめ考えて入試時には入学に直接結び付くような配慮はおこなわないとの姿勢をとっているためと考えられる（家政生活系については宗教系女子大別で後述する）。ただし、理系の学部でありながら理学系での配慮をみると、学部数は少ないが

表 1 入試時の配慮の実施率・学系別

単位% ( )内は学部数

	受験室を別に用意	特別な器具の使用を許可	特別な出題方法(点字など)	代替問題を用意	回答方法の工夫(転記など)	試験時間の延長
人文科学	59.3 (51)	47.7 (41)	42.4 (36)	11.9 (10)	27.6 (24)	47.6 (40)
社会科学	65.4 (53)	45.6 (36)	41.3 (33)	8.8 (7)	30.0 (24)	47.5 (38)
理学	62.5 (5)	62.5 (5)	37.5 (3)	0.0 (0)	25.0 (2)	25.0 (2)
工学	26.9 (7)	12.0 (3)	8.0 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
農学	30.8 (4)	11.1 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	11.1 (1)
医学	6.7 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
薬学	11.1 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
体育芸術	45.5 (5)	27.3 (3)	27.3 (3)	9.1 (1)	27.3 (3)	18.2 (2)
家政生活	42.9 (14)	26.7 (4)	28.6 (4)	6.7 (1)	20.0 (3)	20.0 (3)

「代替問題の用意」以外では配慮をしたとの割合が25%から60%以上ある。これは理学部の中には数学科・情報科学科・情報数理科・計算機科学科など、身体を使っての実験・実技が他の理系の学部・学科より比較的少なく、また最近の機器の性能機能の向上により教育研究において身体の障害がさほど問題とならない学科があるためと考えられる。

#### b 今後の対応

次に学系別に、障害学生の入学に今後どのように対応するかについて障害の種類別にみたのが表2である。「積極的に受け入れる」との回答が、実数は少ないが人文科学系・社会科学系ではいずれの障害種別についてもみられる。さらに1学部のみではあるが、理学系で車椅子使用者・松葉杖使用者・全盲者・弱視者を「積極的に受け入れる」との回答があった。他方、工学系・農学系・医学系・薬学系・体育芸術系では、一部

(農学系での弱視者および難聴者と体育芸術系での難聴者)を除き「積極的に受け入れる」との回答はなかった。また「受け入れない」との回答は、すべての障害種別において工学系・医学系・薬学系でその比率が人文科学系・社会科学系に比べ高くなっており、特に両手機能全廃・車椅子使用・全盲・ろうなどの重度の障害では半数以上の学部がそのような意思表示をおこなっている。そしてやはり、他の理系の学部比べ理学系で「受け入れない」との回答は少ない。また、体育芸術系・家政生活系も「積極的に受け入れる」は体育芸術系の難聴者についてのみであり、「受け入れない」は体育芸術系では両手機能全廃者・全盲者・弱視者・難聴者で、家政生活系では松葉杖使用者で割合が高くなっており、理学系を除く理系ほどではないが同様の傾向を示している。これは、先にみた入試時の配慮と同じ傾向であり、理学を除く理系や体育芸術系では、入学後の

表2 今後の対応\*・学系別・障害種類別

上段は「積極的に受け入れる」下段は「受け入れない」 単位% ( )内は学部数

	両手機能 全廃	車椅子 使用	松葉杖 使用	全盲	弱視	ろう	難聴
人文 科学	4.7(3) 23.4(15)	4.3(3) 15.7(11)	4.2(3) 2.8(2)	4.6(3) 25.8(17)	4.3(3) 5.7(4)	4.8(3) 22.2(14)	4.2(3) 5.6(4)
社会 科学	3.0(2) 21.2(14)	4.3(3) 12.9(9)	4.2(3) 4.2(3)	3.2(3) 12.6(12)	4.4(3) 4.4(3)	4.8(3) 14.3(9)	4.5(3) 6.0(4)
理学	0.0(0) 33.3(2)	20.0(1) 0.0(0)	14.3(1) 0.0(0)	16.7(1) 33.3(2)	14.3(1) 0.0(0)	0.0(0) 16.7(1)	0.0(0) 0.0(0)
工学	0.0(0) 60.0(15)	0.0(0) 40.0(10)	0.0(0) 16.0(4)	0.0(0) 60.0(15)	0.0(0) 24.0(6)	0.0(0) 48.0(12)	0.0(0) 24.0(6)
農学	0.0(0) 16.7(2)	0.0(0) 8.3(1)	0.0(0) 8.3(1)	0.0(0) 8.3(1)	7.7(1) 0.0(0)	0.0(0) 8.3(1)	7.7(1) 0.0(0)
医学	0.0(0) 86.7(13)	0.0(0) 66.7(10)	0.0(0) 46.7(7)	0.0(0) 87.5(14)	0.0(0) 37.5(6)	0.0(0) 87.5(14)	0.0(0) 53.3(8)
薬学	0.0(0) 75.0(9)	0.0(0) 50.0(6)	0.0(0) 25.0(3)	0.0(0) 84.6(11)	0.0(0) 25.0(3)	0.0(0) 66.7(8)	0.0(0) 53.9(7)
体育 芸術	0.0(0) 44.4(4)	0.0(0) 11.1(1)	0.0(0) 0.0(0)	0.0(0) 44.4(4)	0.0(0) 22.2(2)	0.0(0) 22.2(2)	10.0(1) 10.0(1)
家政 生活	0.0(0) 16.7(2)	0.0(0) 16.7(2)	0.0(0) 15.4(2)	0.0(0) 25.0(3)	0.0(0) 7.7(1)	0.0(0) 7.7(1)	0.0(0) 7.7(1)

\*回答は、「積極的に受け入れる」「一定の条件つきで積極的に受け入れる」「一般の学生と同じ扱いとする」「受け入れない」の4つの選択肢から1つ選ぶものである。

勉学の困難を考慮してこのような判断をおこなっているものと考えられる（家政生活系については後述する）。

## （２） 宗教系・女子大別

### a 入試時の配慮

次に障害学生に対して入試時にどのような配慮をおこなったかを宗教系女子大別にみたのが表3である。それぞれの配慮の実施率の高い方からみると次のようになる（「一般」とは他の分類に属さない私立大学および国公立大学である）。

	1位	2位	3位
受験室を別に用意	キリスト教系	キリスト教女子	仏教系
特別な器具の使用を許可	キリスト教系	キリスト教女子	仏教系
特別な出題方法	キリスト教系	仏教系	キリスト教女子
代替問題を用意	キリスト教系	キリスト教女子	一般
回答方法の工夫	キリスト教系	キリスト教女子	女子大
試験時間の延長	キリスト教系	キリスト教女子	仏教系

このことから、宗教系（キリスト教系・キリスト教女子・仏教系）において配慮の実施率が高く、他方、女子大や一般の大学で実施率が低いことがわかる。入試時に何らかの配慮をすることはそれだけ障害学生の受け入れの可能性が高まることであるが、このような傾向があらわれるのは、多くの宗教系の大学がその建学の理念に持つ『博愛や平等』あるいは『相互扶助』などの精神を大学教育の中で実践しようとしている（健常者と身体に障害を持つ人とが共に生きる）ことによると思われる。逆に、その他の大学は、国公立大学での官吏・技術者の養成や女子大での良妻賢母教育に代表されるような、知識や技術の修得など実学的な教育、あるいは社会の中でしばしば重んじられる大学卒という肩書きを志向しているために宗教系と比べ配慮の割合が低くなっているのではないだろうか。

### b 今後の対応

さらに宗教系女子大別に、障害学生の入学に今後どのように対応するかについて障害の種類別にみたのが表4である。該当する学部の実数が少ないので断定的なことは言えないが傾向は次のようになる。「積極的に受け入れる」との回答は、いずれの障害種別においても仏教系と一般にのみみられる（他には女子大で難聴者に対して1学部あるだけ）。他方、「受け入れない」との回答は女子大と一般が宗教系に比べ高い（松葉杖使用・弱視は宗教系では「受け入れない」との回答はみられない）。また、「条件」が具体

表3 入試時の配慮の実施率・宗教系女子大別

単位% ( )内は学部数

	受験室を別に用意	特別な器具の使用許可	特別な出題方法	代替問題を用意	回答方法の工夫	試験時間の延長
仏教系	57.7 (15)	42.3 (11)	42.3 (11)	7.7 (2)	11.5 (3)	38.5 (10)
キリスト教系	79.3 (23)	75.9 (22)	65.5 (19)	10.3 (3)	44.8 (13)	64.3 (18)
女子大	27.6 (8)	27.6 (8)	27.5 (8)	6.9 (2)	24.1 (7)	24.1 (7)
キリスト教系 女子大	63.6 (7)	58.3 (7)	36.4 (4)	9.1 (1)	27.3 (3)	45.5 (5)
一般	48.3 (83)	28.5 (47)	24.8 (41)	7.9 (13)	18.5 (31)	28.9 (48)

表4 今後の対応・宗教系女子大別・障害種別

上段は「積極的に受け入れる」

中段は「一定の条件つきで積極的に受け入れる」

下段は「受け入れない」

単位% ( )内は学部数

	両手機能全廃	車椅子使用	松葉杖使用	全盲	弱視	ろう	難聴
仏教系	8.3(2)	12.5(3)	12.5(3)	12.5(3)	12.5(3)	12.5(3)	12.5(3)
	8.3(2)	8.3(2)	8.3(2)	4.2(1)	4.2(1)	4.2(1)	8.3(2)
	16.7(4)	12.5(3)	0.0(0)	16.7(4)	0.0(0)	16.7(4)	0.0(0)
キリスト教系	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
	7.7(2)	14.3(4)	10.3(3)	11.1(3)	10.3(3)	4.2(1)	10.3(3)
	15.4(4)	3.6(1)	0.0(0)	18.5(5)	0.0(0)	8.3(2)	3.5(1)
女子大	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	3.6(1)
	7.7(2)	11.5(3)	7.4(2)	11.5(3)	7.4(2)	7.4(2)	7.1(2)
	38.5(10)	30.8(8)	11.1(3)	38.5(10)	18.5(5)	29.6(8)	21.4(6)
キリスト教系 女子大	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
	28.6(2)	28.6(2)	33.3(3)	14.3(1)	12.5(1)	0.0(0)	22.2(2)
	14.3(1)	14.3(1)	0.0(0)	14.3(1)	0.0(0)	16.7(1)	0.0(0)
一般	2.1(3)	2.7(4)	2.7(4)	2.8(4)	3.4(5)	2.2(3)	2.8(4)
	12.9(18)	17.7(26)	17.6(26)	10.6(15)	12.9(19)	12.7(17)	15.2(22)
	40.7(57)	25.2(37)	12.8(19)	41.6(59)	13.6(20)	33.1(46)	16.6(24)

的にどのようなものであるかについて詳しい検討が別に必要ではあるが、「一定の条件つきで積極的に受け入れる」とする回答は、両手機能全廃・車椅子使用・松葉杖使用・難聴の障害種別でキリスト教系女子での割合が他の宗教系・女子大・一般と比べ高くなっている。以上より、障害学生の今後の受け入れについても、先の入試時の配慮ほど顕著ではないものの、やはり宗教系がより積極的であると言えよう。

## 2 障害学生の受け入れ率

これまで、「学部の学系が何であるか」「大学・学部が宗教系であるか女子大であるか」により障害者の受け入れに対しての姿勢（入試時の配慮や今後の方針）に違いがあることをみてきたが、それではその違いによって実際に障害者の受け入れ（学部の障害学生の在学）に違いがあるのだろうか。ここではそれをみしてみる。

### (1) 学系別

学系別に障害学生の在学状況をみたのが表5である。ここでの軽度とは松葉杖使用・弱視・難聴の3つの障害の種類を合わせたものであり、重度とは両手機能全廃・車椅子使用・全盲・ろうの4つの障害の種類を合わせたものである。これは日常生活において他者による介護や特別の施設・機器を必要とする程度をもとに2つに分けた。軽度重度合わせての現在（1986年～1989年における在学者）では、人文科学系・社会科学系で受け入れ率がともに半数近くにのぼる。工学系・体育芸術系・理学系が3割台と続き、次いで薬学系・家政生活系の2割台、そして農学系・医学系では受け入れ率が最も低く2割以下である。現在過去（1982年～1989年における在学者）ではやはり人文科学系・社会科学系が高く6割前後、続いて工学系・理学系・薬学系の5割前後、体育芸術系・家政生活系・農学系が3割台となり医学系が最も低く2割以下である。重度の障害についてみると現在および現在過去ともに人文科学系・社会科学系において他の学系に比べ受け入れ率が高いことがきわだつ。軽度の障害では、大学での教育研究活動において身体を使う場合でも比較的困難が少ないためこれまで述べてきた入試時の配慮や今後の対応におけるような学系別での差が重度ほど顕著でないものと思われる。先にみてきた「学系別での受け入れ姿勢」と完全に対応しているわけではないが、受け入れ姿勢で「積極的」だった人文科学系・社会科学系では受け入れ率も実際に高く、受け入れに「否定的」だった医学系・農学系・薬学系・家政生活系で受け入れ率が低くなっている。受け入れ姿勢の「比較的積極的な」理学系と受け入れに「否定的な」工学系・体育芸術系がそれらの中間にある。ただし、この工学系・体育芸術系は大学での教育において実験や実技の比重の高い学部であるから、受け入れている障害学生の中には、障害学生として入学した者ばかりでなく在学中に事故やけがのために障害をもつにいたった学生が含まれているかもしれない。もしそうであるならば、学系別にみた場合、その学系の「受け

入れ姿勢」と「実際の受け入れ」は関連が強いと言えよう。

表5 障害者の受け入れ率・学系別

単位% ( )内は学部数

	現 在 1986年 ~1989年	現在・過去 1982年 ~1989年	軽 度		重 度	
			現 在	現在・過去	現 在	現在・過去
人文 科学	43.7 (38)	56.5 (48)	36.5 (31)	45.0 (36)	21.1 (19)	36.3 (33)
社会 科学	49.3 (36)	62.2 (46)	36.9 (24)	55.2 (37)	30.0 (24)	38.0 (30)
理学	30.0 (3)	50.0 (5)	20.0 (2)	40.0 (4)	10.0 (1)	18.2 (2)
工学	34.6 (9)	53.8 (14)	34.6 (9)	46.2 (12)	3.3 (1)	10.7 (3)
農学	14.3 (3)	33.3 (7)	9.5 (2)	20.0 (4)	5.3 (1)	15.8 (3)
医学	16.7 (4)	17.4 (4)	16.7 (4)	17.4 (4)	0.0 (0)	0.0 (0)
薬学	25.0 (3)	45.5 (5)	25.0 (3)	45.5 (5)	7.1 (1)	14.3 (2)
体育 芸術	35.7 (5)	35.7 (5)	28.6 (4)	35.7 (5)	7.1 (1)	14.3 (2)
家政 生活	23.5 (4)	35.3 (6)	23.5 (4)	29.4 (5)	5.6 (1)	11.1 (2)

## (2) 宗教系・女子大別

宗教系女子大別に障害学生の在学状況をみたのが表6である。障害の重軽度を問わない場合の現在過去と重度の障害の場合の現在でキリスト教女子が一般よりも障害学生の受け入れ率が低くなっているが、それ以外ではいずれも宗教系の学部が女子大や一般の大学・学部を障害学生の受け入れ率において上回っている。これは先の宗教系・女子大別の「受け入れ姿勢」とここでの「受け入れ率」がかなり関連が強いことを示している。



表6 障害者の受け入れ率・宗教系女子大別

単位% ( )内は学部数

	現在 1986年 ～1989年	現在・過去 1982年 ～1989年	軽 度		重 度	
			現 在	現在・過去	現 在	現在・過去
仏教系	61.1 (11)	70.0 (14)	58.8 (10)	61.1 (11)	42.1 (8)	47.4 (9)
キリスト 教系	54.2 (13)	73.9 (17)	39.1 (9)	68.2 (15)	32.1 (9)	55.6 (15)
女子大	25.0 (9)	37.1 (13)	25.0 (9)	34.3 (12)	7.6 (3)	10.3 (4)
キリスト 教系 女子大	46.2 (6)	46.2 (6)	38.5 (5)	46.2 (6)	8.3 (1)	25.0 (3)
一般	35.0 (69)	47.9 (93)	28.0 (53)	38.6 (71)	14.4 (30)	23.1 (48)

## 結論

以上のことから、大学・学部が障害学生の受け入れについて何らかの意思決定をする際、その学部の学系の種類（教育内容・方法の特徴）やその大学・学部の建学の理念（宗教系であるか女子大であるかどうかなど）が「受け入れ姿勢（入試時の配慮や今後の対応）」に影響し、ひいては障害学生の実際の「受け入れ率」につながると考えられる。なお、厳密に言えば、学系別・宗教系女子大別において「積極的な受け入れ姿勢」を示す、あるいは「受け入れに否定的な姿勢」を示す学部ごとに、障害学生の「受け入れ率」をみる必要があるが、学部の実数が少ないため、今回はそのような分析はおこなわなかった。

ところで、大学・学部の障害学生の受け入れについての意思決定に関連する要因は、言うまでもなく今回取り上げた学系の種類や建学の理念ばかりではない。大学学部の規模・所在地域・国公立など、さらには社会の風潮（社会的弱者と呼ばれる人びとへの社会全体の姿勢、たとえば今年国連が提唱した「国際障害者の10年」の最後の年にあたり、行政・民間でさまざまな活動が計画されている）なども要因として重要と思われる。今回の学系・設立理念と合わせてこれらがどのような場合にどのような程度で意思決定にかかわるのかという問題も残されている。さらにははじめに述べたように、今回取り上げたような大学・学部の存在自体の特性よりも人間による判断が障害学生の受け入れの意思決定に大きく関与する場合もあるであろう。これらについては今後総合的に

検討していかねばならない。

### 参考文献

- 天野 ほか 1990年 a 障害者の高等教育に関する調査研究 ―第1次報告書―  
流通経済大学障害者教育問題研究会
- 天野 ほか 1990年 b 「障害者の高等教育」に関する調査研究  
流通経済大学社会学部論叢 第1巻第1号
- 社会事業学校連盟編 1988年  
「社会福祉系の学部のある大学での障害者の受け入れ体制」  
『新社会福祉を学ぶ人びとのために』全国社会福祉協議会
- 障害学生問題研究会 1990年  
「総合大学における障害学生のありかたの基礎研究」  
多賀出版